

ローカル評壇

年を越す課題

<9>

水俣港は南九州唯一の天然の良港である。水俣湾の入り口にある

水俣

水俣港は自然の防波堤をなし湾内は数方メートルの船も停泊できる深さ、そして奥にある水俣湾は理想の避風港だ。だがどんな天然の良港も人工施設を加えなければこれからの港湾としての価値は薄い。

大型船が接岸できる岸壁の整備が急務といわれるゆえである。同港の外港新岸壁に通津管出水アルコール工場の増みつタンクが

進出し、水俣一本渡間の航送船が実現への一歩を踏み出したことは水俣市にとって、ことし最大の喜びだった。増みつタンクは計画に

よると四十一年度中に三千トニ基

干トニ基のタンクと付属施設を約一億円で建設、将来はさらに二千

改修を遅らすドレ、どうなる一万ト岸壁

どうなる一万ト岸壁

このため市では、地先の海面約九千平方メートルを埋め立て、土留造成

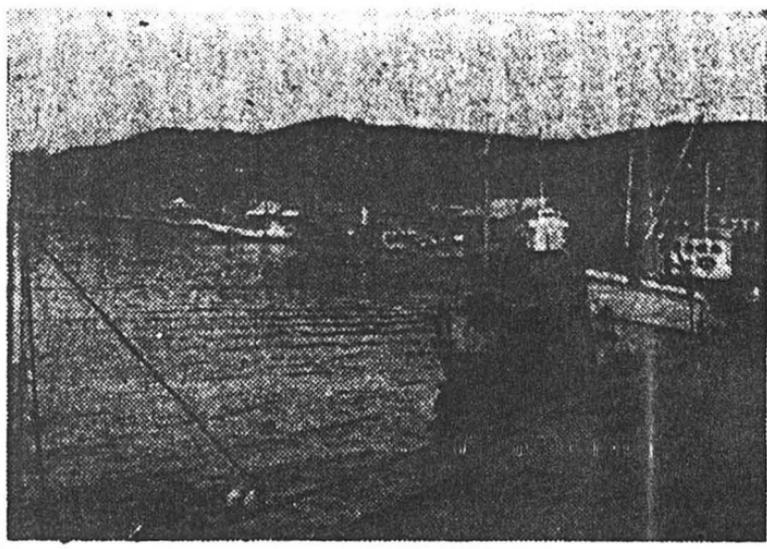
第一期の半分、百メートルの岸壁ができただけで中止となった。

トニ基のタンク各二基と四百トンのアルコールタンク三基も設置し、製品積み出しを行なうことになって

なっている。この施設ができること、三トニ級の外航船が月に三回、東南アジアから原料の増みつを運んでくる。輸入額は七億円、取り扱いは二〇割増加し、貿易港としての同港の格付けもグンと高まるとなることになる。

「海底のドレをしゅんせつすれば水俣再発の危険性がある」と漁業協が反対したのが原因。漁業補償金額で果と漁協との話し合いがつかず、三十六年度以降の手算はお流れとなり、関係者も一時はサジを投げた格好だった。が、昨年十二月ようやく話し合いがまとまって調印が成立、さる二月か

の方、いつころにはかばかしくない。当初の県計画によると、三十六年から五カ年で五千トニ級二基が接岸できる三百メートル（水深六・五メートル）の第二期工事、ひきつづき二万トニ級接岸の百七十メートル（九メートル）の第三期工事が実施される予定だった。しかしこの計画は



早期改修がのぞまれる水俣港

ら工事が再開された。しかし、しゅんせつは始まった再び、一時工事中止」となっている。増みつタンクの建設敷き地造成もこのまま問題が山積している。

る。四月になると漁期に入るので、成のため市が近く工事にかかると、年内には再開される見通した

が、またまた離航しそつた。県の新五カ年計画では、四十四年度までに百十メートルの第二期岸壁、取り付け岸壁と約三億円で作成することになっている。しかしこの工事が完成しても五千トニ級の接岸がせいせい。

外航船はタンカーに集約されるよきに年々大型化の傾向を強めており、七、八千トニから一万トニ級がほとんど。三千トニ級まではチツソ専用港の梅戸に接岸できるが、五千トニ以上になると沖合に停泊したまま積みおろしをせねばならず港湾としての機能をそこなうことおびたしい。貿易港といわれるには少なくとも二万トニ級の岸壁がなければ問題にならない。そのうえ、貿易港として欠かせない防波施設などの出先機関も整っていない。「天然の良港」に甘えていては海中に濁を訴える結果にもなりかねない。水俣市がこれから海外に雄飛しその発展を望むには、何よりも水俣港の早期改修が先決問題とは大方の市民の声だ。